

車いす陸上 魅力伝える

車いす陸上でパラリンピックに4大会連続出場中の副島正純選手(46)は、諫早市による陸上競技用車いすの体験教室が15日、同市の県立総合運動公園補助競技

場で行われ、子どもから大人までの参加者10人とその家族が競技の魅力に触れた。副島選手が所属する車いす陸上クラブチーム「ソシオSOEJIMA」主催。

競技を広く知ってもらい、肢体不自由の人がスポーツを始めるきっかけをつくらうと、4年前から年2回を目安に開いている。ソシオSOEJIMAの選手5人

パラ4大会出場

副島選手が指導

早 諫



副島選手(左から3人目)が子どもたちと一緒にトラックを走る
 県立総合運動公園補助競技場

やスタッフに加え、ひらまつ病院(佐賀県)などのトレーナー陣がサポートした。参加者たちは体の大きさに合う競技用車いすに乗せてもらい、トラックでの試走やリレー競走を通して常用車いすにはないスピード感を味わった。2回目の参加となった長崎県市立片淵中1年の堀江大神君(13)は「競技用手袋をつけるのと、前回よりスピードが出るようになった」と上達を実感した様子だった。

副島選手は「子どもたちは車いすになじむのが早かった。最初は怖がっていた人も、面白かったと最後に言ってきてくれるとうれしい」と笑顔で語った。

(宮本祥太)

東京パラへ2社視察

○体験教室には日本航空(JAL)とスポーツ器具製造のアポワテックの2社が視察に訪れた。2020年の東京パラリンピックに向け、地方での普及活動に注目。現場で得た経験を商品やサービスに還元しようとする動きだしている。

JALは全国の支店を巻き込みながら、地域に密着した普及活動を支援していく。同社コミュニケーション本部長東京20



日本航空の視察者(右)が車いすに試乗し、参加者と一緒にリレーを楽しむ。県立総合運動公園補助競技場

20オリンピック・パラリンピック推進部の阿川

淳之統括マネジャー(44)は「社員が率先して現場の声を聞き、心のバリアをなくす取り組みをする。それがサービス向上につながる」と話す。アポワテックは障害者でも不自由なく使えるスポーツ器具を、体育館などの公共施設に取り入れたい考え。関隆弘社長(46)は「外から眺めるのではなく、中に入って一緒にやるのが器具づくりにつながる」と先を見据える。視察者たちは車いすに試乗するなどして熱心に学んでいた。

副島選手は「企業の協力の在り方はさまざま。この活動が何かに気付くきっかけになれば」と思いを込めた。(宮本祥太)